

国立代々木競技場第一体育館のあゆみ

前ページで紹介しましたとおり、国立代々木競技場第一体育館はオリンピック東京大会の水泳競技の会場として使用されましたが、その後40数年の歳月が経過しました。今回は利用の変遷も含めて第一体育館の歴史にスポットを当ててみます。

◆オリンピック後

国立代々木競技場の建設に当たっては、昭和36年4月17日、文部大臣裁定による「ワシントンハイッ屋内総合競技場建設協議会」が設置され、13回の分科会、5回の総会での審議を経て昭和36年7月20日に第一次答申が出されました。

これによると国立代々木競技場は、「オリンピック東京大会において、水泳（競泳、飛込み）、柔道およびバスケットボールの競技を実施し、大会後は、国民スポーツの殿堂として、国際的、全国的行事をはじめ、広く国民の利用に供し得る施設とする。」というものでした（柔道については日本武道館で行われました）。

そのため、オリンピック競技大会終了後、国立代々木競技場第一体育館（以下、第一体育館）は広く国民の利用に供し得る施設として、冬季はアイススケート場、夏季は水泳場として非常に多くの利用者を集めました。特に1960年代の第一水泳場は入場するための長い行列ができ、日除けのためのよしすが設置されるほどでした。

その後、同種の施設建設が進んだこともあり、暖冬や冷夏などの季節的要因により多少の増減はあったものの、入場者数は徐々に減少していきましました。

表1. 一般公開日数と1日平均入場者数の推移

	第一水泳場		アイススケート場	
	公開日数	1日平均入場者数	公開日数	1日平均入場者数
昭和39年度	—	—	95日	2,955人
昭和40年度	108日	3,451人	137日	1,689人
昭和41年度	90日	4,036人	156日	1,742人
昭和42年度	70日	4,774人	155日	1,725人
昭和43年度	105日	2,467人	145日	1,692人
昭和44年度	96日	2,591人	163日	1,737人
昭和45年度	106日	2,281人	163日	1,884人
昭和46年度	106日	2,236人	155日	2,431人
昭和47年度	100日	2,411人	167日	2,502人
昭和48年度	104日	2,067人	156日	2,343人
昭和49年度	87日	1,713人	165日	2,094人
昭和50年度	106日	1,760人	175日	1,886人
昭和51年度	84日	1,785人	133日	1,528人
昭和52年度	67日	1,824人	129日	1,796人

◆体育館利用の増加

利用に大きな変化が生じたのが昭和52年度でした。この年にバレーボールワールドカップ東京大会が開催され、第一体育館は満員の盛況となりました。この時は氷上に仮設フロアーを設置してバレーボールの大会が行われたのですが、1万席を超える観客席が注目されるようになり、従来の水泳場、アイススケート場という2シーズン制から、体育館利用を組み入れた3シーズン制で施設利用が図られるようになりました。

それからは世界のランキング上位選手を集めた二つのテニスイベントが定着し、昭和59年からは「全国高等学校バレーボール選抜優勝大会（春高バレー）」が行われるようになり、バレーボールの殿堂として世界選手権やワールドカップでも多くの観客を集めています。

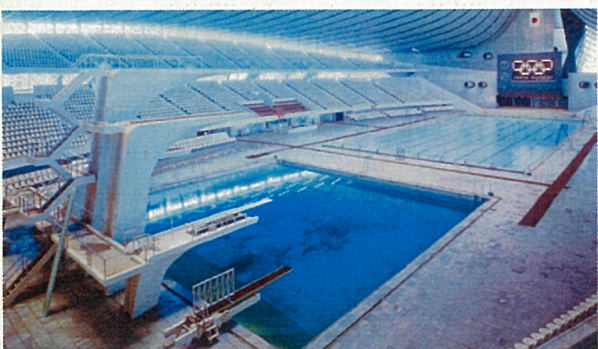
またスポーツの利用がないときはコンサート等の文化的行事にも利用され、若者の街、原宿の新名所という側面も持つようになりました。

平成10年の水泳場中止により体育館からプールに、水泳場終了後のプールから体育館への転換工事が不要となり、また冷房設備の設置により夏季の体育館利用が可能となりました。利用可能日数は大幅に増加しました。

◆第一水泳場・アイススケート場の中止

オリンピック競技大会の会場という知名度と50m×22mという大きさと広い空間が評判を呼び、一般公開開始後の3年間は1日平均4千人を超える盛況となりました(表1)。6月から9月の1シーズンを平均した数字です。8月の日曜日などは、手を洗うような混み方だったようです。

昭和53年からは、体育館利用が始まったこともあり、第一水泳場の一般公開日数は大幅に減少しました(表2)。ただ、公開期間が7月、8月のフルシーズンに限定されたため1日平均の入場者数が増加した時期もありました。



オリンピック競技会で使われた飛び込み台(手前)、50mプール(奥)



アイススケート場として…

その後、平成4年には第一体育館の改修工事のため第一水泳場は公開中止となりましたが、この頃にはわが国の水泳場の数も大幅に増えていたこともあり、代々木競技場第一体育館の果たすべき役割が見直され始め、大会会場としての機能を備えた辰巳国際水泳場がオープンしたこともあり、第一水泳場も平成9年で利用を終了し、翌年からは体育館利用とアイススケート場利用の2シーズン制となりました。

その後、40年以上にわたって一般公開や各種大会に利用されたアイススケート場も、設備の老朽化、利用者数の減少などにより平成17年に幕を閉じ、現在は年間を通じて体育館として利用されています。

◆施設は変化する

簡単ではありますが、第一体育館の移り変わりを書いてみました。年の経過とともに体育施設を取りまく環境には大きな変化がありますが、ちよつとした工夫で新たな利用方法が考えられることもあります。

国立競技場の施設も全体に老朽化が進んでおり、施設の改築には多大な費用を要しますが、時代の要求を取り入れながら適切な改修を行い効率的な施設運営を図っていきたくと考えています。



体育館としての第一体育館

表2. 一般公開日数と1日平均入場者数の推移と形態別施設利用日数

	第一水泳場		アイススケート場		体育館 利用日数	第一体育館 合計利用日数
	公開日数	1日平均入場者数	公開日数	1日平均入場者数		
昭和53年度	52日	2,192人	136日	1,254人	21日	209日
昭和54年度	41日	1,537人	125日	1,745人	16日	182日
昭和55年度	40日	1,221人	81日	1,767人	24日	145日
昭和56年度	41日	1,485人	56日	1,557人	55日	152日
昭和57年度	41日	1,390人	93日	1,179人	17日	151日
昭和58年度	36日	1,493人	60日	1,380人	72日	168日
昭和59年度	35日	1,829人	73日	999人	65日	173日
昭和60年度	38日	1,537人	55日	1,006人	114日	207日
昭和61年度	31日	1,407人	60日	755人	123日	214日
昭和62年度	34日	1,443人	47日	854人	167日	248日
昭和63年度	31日	1,192人	61日	658人	143日	235日
平成元年度	25日	1,257人	43日	679人	156日	224日
平成2年度	37日	1,130人	44日	661人	127日	208日
平成3年度	25日	1,073人	44日	628人	151日	220日
平成4年度	中止	—	45日	566人	134日	179日
平成5年度	32日	698人	中止	—	168日	200日
平成6年度	36日	836人	34日	351人	160日	230日
平成7年度	29日	859人	39日	425人	144日	212日
平成8年度	35日	568人	36日	312人	152日	223日
平成9年度	37日	505人	32日	272人	126日	195日
平成10年度	中止	—	28日	164人	126日	154日
平成11年度	中止	—	35日	293人	132日	167日
平成12年度	中止	—	35日	249人	186日	221日
平成13年度	中止	—	24日	271人	140日	164日
平成14年度	中止	—	33日	336人	185日	218日
平成15年度	中止	—	37日	426人	207日	244日
平成16年度	中止	—	23日	496人	218日	241日
平成17年度	中止	—	中止	—	222日	222日

※第一水泳場、アイススケート場は一般公開の日数を表しているが、第一体育館利用合計日数は第一水泳場、アイススケート場の大会利用を含んだ数字となっている。